

「事業名:人文社会科学の復興知に基づく標葉地域の循環型共同教育の実践」

2021年度補助事業の実績・成果

立命館大学(共同申請:東京大学、福島大学) 連携市町村:川俣町・大熊町・双葉町・浪江町・葛尾村
現地拠点:双葉郡大熊町インキュベーション施設(予定)

事業のポイント

本事業は、風評払拭、リスクコミュニケーション、生業再建、コミュニティ再生などに関する人文社会科学分野の復興知をネットワークし、東日本大震災および原子力災害を研究し、長期避難を余儀なくされた浜通りに関わり研究・教育活動をしてきた3大学が共同で、学生・院生の地域でのフィールド教育、また地域の児童および住民向け教育のプログラムを構築し、教育を通して「人」が循環し交流する「地域循環型共同教育プログラム」を構築する。ひいては浜通り地域で活躍する人材、浜通り地域を研究する「地域循環型」人材を育成する。具体的には、大熊町・双葉町・浪江町・葛尾村等の標葉地域を中心に実践する。

今年度の活動実績

- 教育プログラム①** 東京大学「メディア・ジャーナリズム研究指導」「原子力災害論」において現地フィールドワークを11月に実施。また福島大学において、「Fukushima's History and Culture」として、福島大学に在籍する交換留学生・正規留学生・研究生・日本人学生を対象にし、福島の震災後の10年間の歩みについて学習した。
- 教育プログラム②** 立命館大学「チャレンジふくしま塾」を11月12月1月の4回にわたって現地で実施した。のべ132名が現地フィールドワークを行った。
- 地域学習プログラム** 福島大学が葛尾村をフィールドに帰村状況に関する全戸調査(215世帯)を役場・地域団体と連携し実施。



今年度の成果

今年度の成果として、まず、現地拠点の整備を行った。大熊町内に人員を配置し、標葉地域の各自治体との協力体制ならびに現地コーディネートの体制を整えた。また、今年度は地域課題解決の担い手育成として、福島県の原子力災害からの復興に資するリスクコミュニケーションに取り組む人材、ならびに地域コミュニティ再生に取り組む人材育成という教育プログラムの試行を行った。具体的に、学生の現地フィールドワークを行い、東京大学よりのべ、87名、立命館大学よりのべ132名が現地でプログラムを受講した。また、地域プログラムとして福島大学が中心となり、葛尾村において、村役場協力のもと、地域の地域NPO団体と連携し、村民に対する悉皆調査(訪問面接調査)を学生が主体となり実施した。結果として、震災から10年以上が経過した集落の実態を把握した。「解のない課題」に挑戦する人材育成に向けた、来年度の本プログラムの「本格実施期」につなげる成果が得られた。

